アジアの現代文芸　THAILAND［タイ］⑨

หมอแมกไซไซ

イサーンの医者

農村医療と開発にかけたドクター・カセーの半生

スミット・ヘーマサトン著

野中耕一監修／坂田久美子編訳

財団法人大同生命国際文化基金

アジアの現代文芸　THAILAND［タイ］⑨

หมอแมกไซไซ

イサーンの医者

農村医療と開発にかけたドクター・カセーの半生

スミット・ヘーマサトン 著

野中耕一監修／坂田久美子編訳

財団法人大同生命国際文化基金

イサーンの医者

農村医療と開発にかけたドクター・カセーの半生

スミット・ヘーマサトン 著

野中耕一 監修　坂田久美子 編訳

1995年3月28日発行

発行者　吉澤欣一

発行所　財団法人 大同生命国際文化基金

〒550　大阪市西区江戸堀1-2-1　大同生命大阪本社ビル内

☎06-447-6111

制作協力　日経事業出版社

印刷／広研印刷・幸印刷　製本／関口製本

©1995　THE DAIDO LIFE FOUNDATION

読者の方へのお願い

お読みになりました感想、当財団へのご要望をお寄せ下さい。

目次

メッセージ　シャワッツ・アッタユック
訳者紹介　霜山徳爾

イサーンの医者　スミットヘーマサトン
第一章　貧しい家族　3
第二章　新たな門出　13
第三章　大学生活　24
第四章　開発の仕事　35
第五章　障害　43
第六章　前進に向けて　78
第七章　マグサイサイ賞受賞　107

イサーンの医者

スミット・ヘーマサトン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　貧しい家族

「水はいかが、水！　一杯二十五サタン*だよ！　喉の渇きにどうぞ！」

幼い子供の水売りの声がする。体は痩せて小さく、ボロボロの上着を身にまとい、汽車の乗客たちに大声で呼びかけている。ここはムアンポン駅のプラットホーム。イサーン（訳注＝東北タイ）の片田舎の小さな町である。

「おい、そこの子、こっちに早いとこ一杯くれ。ぐずぐずしてると汽車が発車しちゃうぞ」一人の乗客が列車の中から声をかけた。

「ここは、何て町なんだ？　やけに暑いな。おい、おまえ、ここからコンケーンまであと何キロだい？」

「ムアンポンですよ、おじさん。コンケーンまではあと七十キロです」水売りの子は答えた。彼は二十五サタンを受け取ると、バケツを抱えて、呼んでいる次の乗客に向かって走っていった。半分以上水の残っている大きなバケツを提げて、あまりに急ぎすぎたので、か細い体の彼は危うくつまずいてひっくりかえるところだった。

……汽車は走り去っていった。しばらくして、男の子はバケツの底に少しだけ残った水をプラットホームの植木にかけ、汗でびしょ濡れになった顔を手で拭った。それから売り上げの小銭を数えた。

「二バーツ……三バーツ……三バーツ五十サタン……」

「セー！　今日の売り上げはいくらだい？」同じ年頃の水売り仲間が尋ねた。

「三バーツ五十サタンだよ」

仲間にいくら売れたのかなどとも聞かず、いちもくさんに家に帰っていった。家には彼の水売りで得た金で夕食を買おうと待っている家族がいる。

「お母さん、今の列車はお客が少なくって。三バーツ五十サタンしかないよ」小銭を駅からずっと握りしめていた小さな手を差し出し、母親の前で広げてみせた。

「ありがとうよ、おまえ。先に水浴びしてらっしゃい。それからご飯だよ。寄り道してきちゃいけないよ」

水売りの子は、母親の言うことを黙って聞いた。母親は水浴びに行かせるたびに、いつも同じことを繰り返し言うのである。それというのも、水浴び井戸は家から一キロも離れていて、子供が道草を食うことが心配なのだ。

男の子は十歳。ランプのそばに座ってご飯を手づかみで食べている。そのランプの光が、母親の顔をぼんやり照らし出している。姉は、床に座って字を書いている。父親は病気で寝込んでいる。彼はご飯を口に運びながら、姉が切り抜いて壁に張っている絵を眺めていた。

「ねえ、この絵に描いてある食事はとってもうまそうだな。お姉ちゃん、これどこから持ってきたの？　僕たち、いつになったらこんなご馳走食べられるのかなあ」ちょっと姉に尋ねたが、その言葉も飲み込むようにして塩漬け魚のおかずにご飯を一心不乱にかっ込むのだった。

夜は更けてきた……母親はまだ家の入り口の方に座っている。男の子は二日後に迫った修了試験の準備で勉強していた。

「セー、ちょっとこっちにおいで」母親は静かに、心なしか厳しい口調で彼を呼んだ。

「なあに、お母さん」

「こんな話、母さんはしたくないんだけどね、でもおまえももう十分大きくなったことだし。それにねえ、うちの家族はひどく貧しいだろ」

「何のこと？」

「父さんは重い病気なんだよ。おまえの兄さんは母さんに送金してこない。それでね、母さんはおまえに学校やめてもらわなきゃならないんだよ」

「お母さん、それはいつなの？」即座に聞き返した。

「今度の修了試験が終わってからだよ」

母親の顔を見やった。母親の目には涙が浮かび、一筋伝って落ちた。彼はしゅんとなった。どうしていいかわからず、母親の膝の上に顔を伏せて泣いた……やっと、か細い声で言うのだった。

「お母さん、わかった……」

「もう寝なさい。仕事の話は、センヨ那に頼んだら、修了試験が終わってから仕事を始めてもいいと言ってくれてるからね」

この水売り少年の人生にとって大きな転機だった。少年はやっと十歳、小学二年に在学中だ。少年は、寝つけなかった。貧しい家に生まれついた自分の定めが恨めしかった。父はいつも重い病を抱え、母が物売りで得る金は米と薬代に消えてしまう。近所の家もみなほとんど同じように貧しい暮らしだ。頭の中はいろいろな考えがかけ巡り、次から次へと疑問が生まれて、混乱するばかりだった……貧しい者は、見捨てられてしまうのだろうか……誰がこんな僕たちに救いの手を差し伸べてくれるのだろう……。

父親が、カヤの中から力ない唸り声をあげた。母は急いでカヤの中に入り、父親の世話をしてい

る……容体がひどく悪くなったのだろう……けれどもこんな夜中に来てくれる医者はどこにもいない。

修了試験はすっかり終わった。彼はもう学校には戻らない。そのかわりに、皮や山の幸を買い付けてバンコクへ送っているセン旦那のところに働きに行かなければならない。初めのうち、その仕事のことはほとんどわからなかったし、月々の給料がどのくらいもらえるものなのかも、よくわからなかった。ただ先輩を手伝って、村人が売りにきた動物の乾燥皮を束ね、倉庫に収めることが彼の仕事だった。

父親の容体は、少し良くなってきたようだった。母は、またいつものように品物を肩に担いで物売りに出かけるようになり、家族の収入も増えだした。それでも彼は、雇い主から特別の許可を受け、これまでどおり、駅に行っては水売りをし続けた。毎日、水売りに行かせてもらうかわりに、夕方は一時間延長して働かなければならなかった。

一年ばかりすると、彼は水売りの少年から、何でもてきぱきとよくできる人間になっていた。売り買いの仕事から仲間の食事作りに至るまで、旦那に代わって何でもやった。彼は、物を売りにやってくる貧しい人たちに同情して、買えるだけの最高の値で引き取ってあげるようにしていた。常連客のほとんどは、店先に彼の姿が見えないと、ほかの仕事を先にしてからもう一度出直してくるのだった。というのも、それまでは店主が秤をごまかしていたがそれもやめさせたし、時々は貧し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い人たちのために少しでも高く買い取ることもしたからである。
ムアンポンは、依然として何も良くはなっていなかった。村人たちはまだ、何キロも町まで歩いて出かけて来なければならなかった。それも、ほんの少しの金を得るために歩いて売りに来るのである。雨は降らず、土地はますます固くカラカラに枯れて、不毛の地になってしまった。
村人たちの顔付きは暗く曇っていた。たんぼはひび割れてしまい、そのうえ、最悪なことに伝染病が蔓延してきた。
病気に罹った村人は、役場に治療を求めて歩いてやってきた。しかし、そこには医者の資格を持たない助手が一人いるだけだった。保健所といってもひどくみすぼらしい掘っ立て小屋にすぎず、設備については、全く話にならない。村人たちにほんの少しの応急手当て用の薬が与えられるだけだ。それだけでも村人たちは大喜びなのである。ほかには何もないのだから……彼は、子供心に考えはじめていた。村人たちに何をしてあげられるのだろうか……と。
長姉が嫁いで所帯を持ち、送金もしてくるようになったので、家の状況は少しは良くなってきた。それでも彼はよく働き、雇い主からもかわいがられた。稼ぎは、月給も水売りの分も全部母親に渡して家計の助けにしていた。
そして、ある日のこと……
「カセー君……明日は皮を買い付けないでくれ。俺はこの店を売り渡してしまったんだ」

雇い主が言ったのは、それだけだった。彼は雇い主がもうこの商いをやめてしまうのだということを悟らされた。

「それじゃ、村人たちが皮を担いで売りにきても困るじゃないですか。旦那、あと一週間店を開けておくわけにはいきませんか？　そうすれば村人たちに閉店のことを知らせてあげられるんですが」

「あと三日したら、店の買い取り人が来てしまうから、俺は待ってるわけにいかないんだ。明日送る皮は最終便さ」

旦那はもう彼の言うことを聞こうとしなかった。翌日には商売をやめ、月給を支払った。

物売りの子カセー少年は、村人たちが動物の皮を背中に担いだまま空しく帰っていく姿を見て、気の毒でならなかった。旦那がなぜ突然店を閉めてしまったか、村人たちにうまく話せず、自分の給料のほとんどをお疲れ賃だといって渡したのである。

こうして彼は、旦那の家を立ち去って、また以前のように水売りだけをすることになった。そして時間があれば、乗客が捨てていった包み紙の新聞紙を広げて読むのだった。

下の姉は、乾物屋を営む人と結婚して、クムパワピー（訳注＝コンケーン県の北隣に位置するウドンタニー県にある）に引っ越していった。兄はまだバンコクで仕事をしている。子供の中で彼一人だけ家に残り、家のことを一切やった。

ある晩、母は姉からの手紙を受け取った。
「姉さんは、嫁ぎ先の商いがうまくいってて、おまえに手伝いに来てほしいというんだよ。そうしたら、おまえに月々の給料をくれると」母が彼に話しかけた。
「もし、おまえが行くんなら、そう返事を書いとくけど、どうかい？　駅まで迎えに来てもらえるようにね」
「えーっ、そしたらお母さんやお父さんは？」
「大丈夫だよ。父さんはもうだいぶ良くなってきたから心配しなくていいんだよ。それに、おまえが父さんにいくらかでもお金を送ってくれたら……どうだい？」母はそんなふうに言うのだった。
旅に出たのは初めてだった。姉さんのところでは、新鮮な農作物を市場のお客に運ぶ仕事を手伝った。母への送金は毎月怠らなかった。
そこには、多くの人たちがいた。金持ちもいた。朝になると、学校に通う生徒たちが店の前を通り過ぎていく姿もあった。彼は、もう一度勉強のことを思い出すのだった……勉強がしたい。
「お姉さん、僕どうやったらまた学校に行けるようになるのかな」
「冗談言っちゃいけないよ。おまえはもう十三歳になってるんだよ。もう学校なんか行く年じゃないでしょ……そうだね、だけど本当にその気なら、やってみるかい？」
その後、姉は彼が何とか学校に行けるように手配してくれた。ただし、小学二年を修了しただけ

だったので、あらためて三年生から始めなければならなかった。

ところが、学校に通うようになって一年とたたないうちに、不幸なニュースに出会ってしまった。長いこと病に苦しんでいた父が、帰らぬ人となったのである。姉のところの仕事も学校もやめて、母のもとに戻り、一緒に暮らす決意をした。母の物売りの仕事を手伝いながら、汽車の来る時間になると駅に行って、また昔のように水を売り歩いた。

一番上の兄が家に帰ってきた。彼は少しまとまった金を持って帰ってきて、それを元手に商売を始め、母には、もうこれ以上仕事をしないよう頼んだ。彼は兄を手伝って小売店に商品を卸す仕事に就いた。同時に、兄が始めた新聞販売所も手伝い、配達の仕事もした。

貧困であること、そのうえ小さい頃からきつい仕事を余儀なくされていたことから、カセー少年はとても内向的で寡黙な子供になった。しかし、半面で他人に対しては非常に人当たりがよく、親しみのもてる子供でもあった。

長兄の仕事は順調に伸びて、母と彼を兄の家に引き取ってくれた。

それにつけても、彼はもう一度勉強したいと、切実に思い焦がれるのだった。

*タイの通貨単位＝一バーツが約四円（一九九五年二月末現在）。サタンはバーツの下の単位で百サタンが一バーツ。

＊＊タイの教育制度＝この当時のタイの義務教育は満六歳を過ぎてから四年間となっていた。六歳以降はいつでも入学でき、本文第二章にあるように、飛び級および延級も可能である。ちょうど日本の戦前の教育制度を思い出してみるとわかりやすい。この間が小学校である。その後は八年間の中等教育（または高等教育）が続き、大学教育は四年間である。いずれも有料で進学率は非常に低い。小学校すら給食費、教科書代、制服代がかかるため、農民層の中には通学できない子も多かった。一九八〇年代になって教育制度の改正がなされ、義務教育は六年間と定められた。なお本書では、わかりやすくするため日本の教育制度と同様に小、中、高校と訳しておく。

第二章　新たな門出

「そこの子、ちょっとこっちにおいで」中年の男性が呼びとめた。イタンバムルン学校の校長である。ちょうど新聞配達をしていた、ある朝のことだった。

「君は勉強しないで新聞配達してるのかね」

「勉強はしました。でも、今はもうやめました。小学二年しか終えていませんけど」彼はそう答えたが、校長先生がなぜそんなことを聞きたがるのかわからなかった。

「また勉強したいとは思わないかい？」校長先生は愛情のこもった眼差しを向けながら尋ねるのだった。彼はすぐさま答えた。

「勉強したいです。でも、僕の母はとても貧しくて僕を学校に行かせるすべがないんです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.